

# 〔発掘余話〕金沢城跡五十間長屋出土の「鋤始」刻石

北野博司

## 1 刻石の発見

石垣解体調査が始まって間もない1998年11月6日の午後4時頃、ある作業員が最上段の北東角石の裏側の栗石を掃除していて、明らかに他とは違う四角い切石を発見した。表面をきれいにすると彫りもあざやかな文字が刻まれていた。直ちに近くにいた調査員が呼ばれた。

「宝暦十三癸未年 鋤始 六月廿五日」

文字を見た調査員が興奮を隠しきれなかったことは言うまでもない。私はその日の夕方に現場へ行った。調査員らと今日の調査成果や今後の課題などを話し合おうとしていたところへ、某新聞社の記者が訪ねてきたため現場を案内していたが、その最中にもいつもの疲労感の漂う夕刻の現場の雰囲気と違うものを感じていた。対応を終えて現場事務所へ帰ろうとしたとき、呼び止められ刻石発見の事実を知った。5時半を過ぎて急にあたりが暗くなってきたが、石垣解体工事の石工さんたちと刻石を取り囲んでしばらく興奮の余韻に浸っていた。

## 2 なぜ「宝暦十三年」なんだ!!

しかし、調査員の第一印象は一律に「なぜだ!!」。というのは、我々は調査当初からある仮説を立てていた。五十間長屋台石垣の上部は、江戸後期（19世紀）の積み替えではないか、と考えていた。

金沢城跡は文化五年（1808）に二の丸を中心とした大火があり、五十間長屋の石垣も大きな被害を受けた。この時、橋爪門続櫓の石垣が修築された記録が残っている。安政年間には二度の大地震があり、城内各所で石垣が破損した。また、記録に現れない修築もあろうと考えていた。一方、五十間長屋台石垣の内部の掘り下げ調査を始めてまもなく、釉薬瓦が出土することが目に留まった。これに対して、金沢城跡では釉薬瓦の初現は江戸後期を遡らないのではという先入観めいたものがあつた。

文化五年の石垣修理記事と釉薬瓦の二点から、漠然とではあるが五十間長屋上部は文化五年の修築ではないかと考えるようになっていた。そこへもってきての「宝暦十三年（1763）」である。

「鋤初めの刻石が石垣の最上部にあるのはおかしい。」「江戸後期の解体中に出土し、その際に最上部に改めて置いたのではないか。」さまざまな解釈が話し合われた。

## 3 えっ? 「鋤始」

ところで、刻石は2個あつた。年号、月日が全く同じ「鋤始」の刻石が2個並んでいる。夕闇の中で見ていたこともあり、さほど不思議にも思わなかった。とりあえず、ボラロイド写真を撮って埋文センターへ帰った。

センターで写真を前にあれこれ話しているうちに、ひとりが気づいた。一方の刻石を指して、「あれっ、これ“鋤”とちがう?」2つは同文ではなく「鋤始」と「鋤始」が対になっていたのだ。そういえば、今日の朝刊に能登空港着工の安全祈願祭で代議士や知事が「カマ入れ」「クワ入れ」「スキ入れ」をやったという記事が載っていた。「鋤」と「鋤」はそういうものか、なんとなく納得した。

## 4 「鋤」と「鋤」と

現場ではそれから刻石周辺の精査や実測、写真撮影が行われ、数日後に取り上げが行われた。ここでまたもや啞然とすることが起こった。手前にある「鋤始」の刻石を取り上げ、裏についた土をはら

うとそこにも小さい文字があった。よく見ると「鋤」と読める。調査員が目を疑い、もう一度表を見た。表は「鋤」に間違いはない。調査員はニヤリとして、次の「鋤始」刻石を取り上げにかかった。裏にかえした。「やはり！」とうなづく。そこには予想通り「鋤始」と刻まれていた。「冗談キツーツ。」

この一部始終は、調査状況を撮影に来ていた埋文センター企画課職員がビデオテープに収めた。貴重な映像である。

## 5 記者発表に向けて

金沢城跡は県都金沢の礎を築いた藩主前田家の居城であり、藩政の中枢部である。城址公園整備のあり方などとも絡んで県民の関心は非常に高い。発掘調査現場にはマスコミや見学者が訪れることが多い。その対応にあたるのは調査員であり、調査成果があればこれをまとめて記者発表するのも調査員の大事な仕事である。

今年度の調査では、6月に全国初の鉄砲鍛冶遺構の検出、10月には築城初期の新たな堀と土橋の発見でそれぞれ記者発表を行ってきた。今回も誰が言うともなく記者発表が近いことを感じ、資料の探索が始まった。『金沢城郭史料〔後藤家文書〕』（石川県図書館協会）『金沢御堂・金沢城調査報告書』（県教委）『金沢城跡』（県教委）『金沢城』（県歴史博物館）が手近にあるパイプである。

## 6 史料調査はじまる

実は春先の「御鉄砲所」の発掘の時もそうだったが、調査前から事前によく絵図を調べていれば、そこで鉄砲鍛冶遺構が発見される可能性は十分予測できた。と、後になって思う。調査区の間所が鉄砲関係の役所の「鉄砲掃除所」「摩所」「細工所」と記載される場所にあたっていたからだ。

今回も、史料を調べはじめてすぐに宝暦十三年（1763）に五十間長屋の石垣が修築された記録のあることが分かった。宝暦の大火（1759）のすぐ後である。なぜ「鋤始」なのに竣工時に置くような位置から出土したのか、釉薬瓦はこの時期まで遡るのか、の問題を除けば、素直に古文書のとおり解釈すればよいということになる。菱櫓側の石垣内部の栗石に混じって見られる焼土層を宝暦の大火に伴うものとすれば、それを切って作られている五十間長屋側の石垣が宝暦十三年の修築ということで矛盾はない。菱櫓～五十間長屋～橋爪門続櫓の石垣の修築過程は、解体調査が進めば、遺構の上から自ずと明らかにできるはずであり、深くこだわる必要はない。

焦点は、「鋤始とはなんぞや」というところに移っていった。まず、国語辞典の類からはじまり、『石垣普請』（北垣聰一郎著）などを読んでいくうちに、土木工事の起工式にあたること、一般には「始」ではなく「初」の文字を用いること、石垣普請の際にはセレモニーとしてかなり早くから行われていたことが分かってきた。そして、加賀藩の穴生職（石垣普請を担当する職）を代表する後藤家に伝わる「後藤家文書」にも「鋤始」のことが記載されていることを知った。

## 7 「後藤家文書」との格闘

いよいよ、分厚い『金沢城郭史料』を開く時が来た。古文書を読むのはできれば避けたいと思っていた。昔から古典や漢文の類は苦手である。目が漢字の海を溺れそうになりながら泳いでいる自分に、これまでの不勉強を反省してももう遅い。あきらめの気持ちで漢字の意味を追いかけて始めた。

しかし、ここまではまだ良かった。この後、宝暦十三年の五十間長屋石垣修築に関わるある人物の姿がクローズアップされるに至り、すっかり泥沼にはまり込んでしまうのであった。この時点ではまだ知る由もない。

（以下は次号につづく）

宝暦十三年定銀御達始且御押之留

御石垣御普請、当時五拾間下御石垣御修復取懸居申候所、先日半減二仕候様被仰渡候二付、先人懸方相減シ置申候。(中略)

未

八月

菊池弥四郎

山崎小右衛門

羽田伝太夫

本多安房守殿

前田駿河守殿

「文禄年中以来等之旧記」

宝暦九年四月 御城御焼失同十年より安永年中迄御

石垣積直御出来之ヶ所積方等善悪之事

一宝暦十年橋爪足輕番所横切合御石垣繕り、同十年より河

北御門台両方積直十一年出来、同十二年五拾間御長屋

下石垣崩御普請同十三年出来。(後略)

「高石垣等之事」

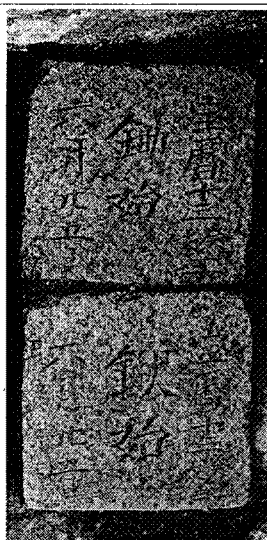
五十間長屋の石垣修築を伝える古文書(『金沢城郭史料』より)

## 金沢城

宝暦十三年「鋤始」くさきり

# 起工式示す初の刻石

江戸時代、加賀百万石の残っているが、具体的な物拠点だった金沢市丸の内証の出古は当初という。金沢城の跡地から、一七六三年(宝暦十三)に「鋤初め」を行なったを示した刻石が出土した。鋤初めは、長屋の石垣最上部で二個見つかつた。いずれも宝暦十三年(一七六三年)の刻石で、一辺十六センチ、厚さ二センチ、重さ七・五グラムで、鋤初めの日付と「鋤始」という文字が入っている。刻石は、金沢城の二の丸跡の東側に位置し、倉庫とめいをうけた。鋤初めは、長屋の石垣最上部で二個見つかつた。いずれも宝暦十三年(一七六三年)の刻石で、一辺十六センチ、厚さ二センチ、重さ七・五グラムで、鋤初めの日付と「鋤始」という文字が入っている。



金沢城の石垣から発見された「鋤始」の刻石

金沢城は、一七五九年(宝暦九)四月に大火に見舞われたとされる。その際、ほとんどの建物が焼失し、石垣が壊れたが、刻石は、この石垣の修復工事の鋤初めを記録するため作られたらしい。

古文書には、当時、加賀藩で石垣工事を担当した正木家が、宝暦年間と大掛かりな鋤初めを行って藩主から拝領物を受けた記録も残っている。

発掘調査にあつた石川県埋蔵文化財センターは、「儀式を重んじる加賀藩が大火からの復興を記念して刻石を作ったのではないか」と話している。

刻石発見の新聞記事(読売新聞H10.12.10朝刊)





「菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台」の石垣解体調査風景



刻石の出土状況(五十間長屋北東隅)



現場事務所での記者発表風景



「宝暦十三年鋤始」刻石